

第4回泌尿器抗加齢医学研究会

9月2日(日)10:00~14:30

10:00~10:30 (講演 25分、質疑応答 5分)

座長:永井 敦(川崎医科大学泌尿器科学教室教授)

『脳とテストステロン』

川戸 佳(東京大学大学院/総合文化研究科/広域科学専攻教授)

我々は、記憶中枢の脳海馬が独自に男性・女性ホルモンを合成していることを発見した。血流 から来る男性・女性ホルモンよりも濃度が高い。加齢によって記憶能力が低下するとき、神経シナプスの密度が少なくなる。ここに男性・女性ホルモンを海馬スライスに加えると、神経シナプスの数を増やし、記憶能力を上げる効果がある。脳内の男性・女性ホルモン合成力を維持できれば、脳の老化を食い止めることが出来るかもしれない。

10:30~11:00 (講演 25分、質疑応答 5分)

座長:松本 成史(旭川医科大学腎泌尿器外科学講座講師)

『女性泌尿器科手術の現在』

奥井 伸雄(医療法人ウロギネネットよこすか女性泌尿器科・泌尿器科クリニック院長・帝京大学医学部泌尿器科女性泌尿器科チーム)

女性泌尿器科は、比較的新しい分野で、泌尿器科と婦人科の境界領域を中心に、女性の骨盤臓器脱・尿失禁・便失禁・膀胱隆起・頻尿・膣炎などをあつかう。骨盤臓器脱とは、膀胱が膣側から下垂する膀胱瘤(経膣膀胱脱)、子宮が脱出する子宮脱、直腸が膣から下垂する直腸瘤などがある。診断と治療ともに、統合的な考え方が必要である。膀胱瘤は、その初期に尿道過動による腹圧性尿失禁を呈している例があり、その時期に恥骨尿道靭帯を補強するタイプの尿失禁手術をすると、その後の膀胱瘤は症状のつよく、修復困難なものになりうる。直腸瘤は、肛門から直腸粘膜が脱出する直腸脱と同時に存在することもおおく、それは会陰体を中心に直腸膣間の組織の脆弱さから出現する。そのため、直腸脱や痔の手術をすることで、直腸瘤は症状の悪化を招くことがある。膀胱隆起では、従来ろう孔部分の膀胱部分切除や腸間膜充填が行われてきたが、再発例があり、それはろう孔の起因となる手術による膀胱に生じる過剰なテンションや疎血が原因と考える。こうした女性泌尿器科の分野は、骨盤内の力学的な考察が必要になる。現在は、骨盤内力学にはインテグラル仮説があり全世界的に支持をされている。

我々は骨盤力学の3D画像による分析をして実施している。我々の取り組みを報告する。

11:00～11:30 (講演 25 分、質疑応答 5 分)

座長:井手 久満(帝京大学医学部泌尿器科准教授)

『アンチエイジング時代の前立腺全摘除術-ロボット手術は期待に応えられるか-』

大山 力(弘前大学大学院医学研究科泌尿器科学講座教授)

早期前立腺癌の治療法には PSA 監視療法、放射線療法、手術療法等多数のオプションが存在する。早期前立腺癌に対する前立腺全摘除術の生命予後は良好であり、cancer control とともに術後の QOL を良好に保持することが求められる。長期生命予後が保証されるのであれば、前立腺全摘除術にもアンチエイジング時代に マッチしたアウトカムが期待される。ロボット手術は果たしてその期待に応えられるのであろうか？

11:50～12:50 ランチョンセミナー

座長:堀江 重郎(帝京大学医学部泌尿器科教授)

『イソフラボンによるがん予防の取り組み(前立腺がんも!)』

渡邊 昌 (公益社団法人生命科学振興会理事長)

最近の前立腺がんり患は胃がん、肺がんに次いで第 3 位のがんになっている。年間 1 万人ほどが患っていて、特に 60 歳すぎから増加する。PSA による検診、重粒子線照射による治療、ロボット手術など話題に事欠かないが、診断、治療よりもなぜこのように増えてきたかという分析も必要であろう。大豆のイソフラボンはテストステロン生成を抑制するので予防的に働く。イソフラボン以外にも多様な予防効果があり、がん予防を主に話したい。

13:00～13:30 (講演 25 分、質疑応答 5 分)

座長:増田 均(癌研究会有明病院泌尿器科副部長)

『老けたくなければファーストフードを食べるな』

山岸 昌一(久留米大学医学部糖尿病性血管合併症病態・治療学講座教授)

糖尿病では、心血管合併症や骨粗鬆症、アルツハイマー病、癌など加齢に伴ってリスクが上がってくる疾病が、10-15 年前倒して出現してくる。つまり、老化のプロセス自体が、糖尿病で加速していることが予想される。最近、この分子基盤に糖化反応の亢進、終末糖化産物(AGE)化反応が関わっていることが明ら

かとなってきた。AGE は、細胞表面受容体である RAGE によって認識され、臓器障害を引き起こすだけでなく、コラーゲンなどの生体内蛋白を悪玉架橋させ、各種疾患の病態に関わる。さらに、食事に由来する AGE の過剰摂取が老化のプロセスを押し進めることも実験動物の系で明らかにされてきている。本講演では、ED や LOH 症候群を含めた様々な疾患に及ぼす AGE-RAGE 系の役割について解説するとともに、新しいアンチエイジング療法の可能性についても言及していく。

13:30~14:00 (講演 25 分、質疑応答 5 分)

『男性医学 2012』

堀江 重郎(帝京大学医学部泌尿器科主任)

今年の男性医学のトピックは、まずテストステロンの認知機能に対する作用の発見。ボケ防止にいよいよテストステロンという時代が来ました。さらに ED 治療については、バイアグラだけでなく、デバイスで血管を強化して治すことが可能になりそうです。今年も新しいトピックで楽しく男性医学を勉強しましょう。

14:00~14:30 (講演 25 分、質疑応答 5 分)

座長: 大家 基嗣(慶應義塾大学医学部泌尿器科学教室教授)

『酸化ストレスと腎臓』

伊藤 貞嘉(東北大学大学院医学系研究科・腎・高血圧・内分泌学分野教授)

腎臓は酸素消費の多い臓器であり、相対的に虚血になりやすい臓器である。腎臓における酸素消費のほとんどは再吸収に用いられている。一方、腎臓におけるエネルギー源は、皮質では脂肪酸であり、髄質では糖であるが、髄質での糖代謝は乳酸までの解糖系で終わる。また、腎臓は空腹時のみならず、摂食後にも糖新生をしている。これらの代謝過程は、腎血行動態や尿細管機能と密接に関連して、体液や循環の恒常性が保たれている。糖尿病、高血圧や慢性腎臓病ではこのような精巧な調節のバランスが崩壊してくるが、その過程で酸化ストレスが極めて大きな影響を及ぼすことが明らかになってきた。本講演では、特に、糖尿病と慢性腎臓病の病態生理における酸化ストレスの果たす役割を述べる。